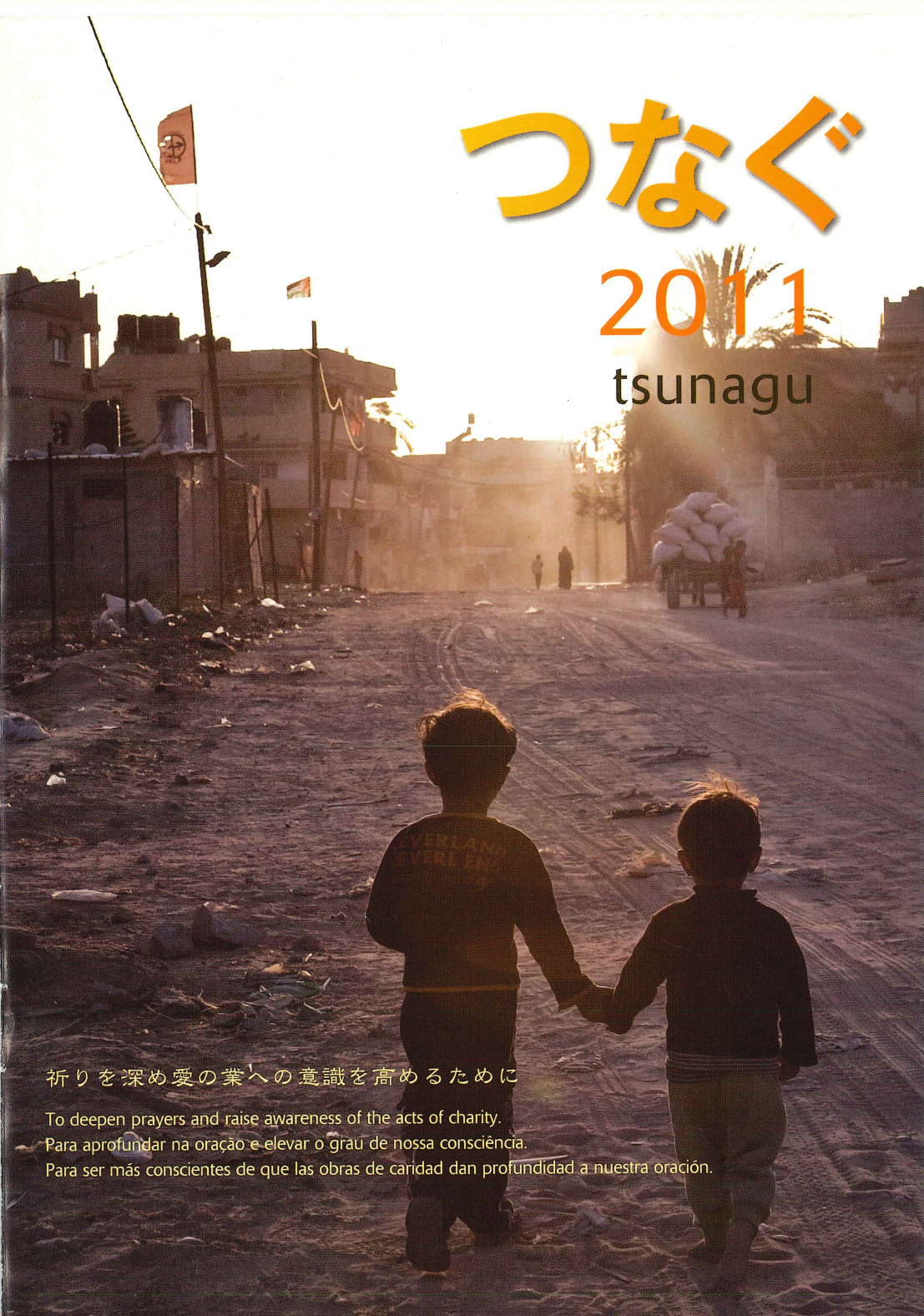




つなぐ

2011

tsunagu

祈りを深め愛の業への意識を高めるために

To deepen prayers and raise awareness of the acts of charity.

Para aprofundar na oração e elevar o grau de nossa consciência.

Para ser más conscientes de que las obras de caridad dan profundidad a nuestra oración.

目 次

四旬節愛の献金趣意書	2
2010 年四旬節キャンペーン報告	3
この冊子の使い方	4
英語、ポルトガル語訳のご案内	5
四旬節第1主日に	カリタスジャパン責任司教 菊地 功 6
愛の業、その主役は誰か	
一人ひとりが神の召し出しに応えることができるように	
四旬節第2主日に	カリタスジャパン援助部会 11
いつも、ともに	
連帯のうちに言う緊急災害支援	
四旬節第3主日に	カリタスジャパン啓発部会 16
人と人とをつなぐ	
「いのちを守る」ための小教区での取り組み	
四旬節第4主日に	カリタスジャパン援助部会 21
小さくて、大きな気付き	
自分たちの手で生活を変える	
四旬節第5主日に	カリタスジャパン啓発部会 26
教会が生きる支えになるために	
「カトリック教会における自死についての意識調査」より	
受難の主日に	カリタスジャパン援助部会 31
声なき人々の声を届ける	
貧困の根本原因の解消に向けた「間接的」方法	
En el tercer domingo de Cuaresma	36
Uniendo a unas personas con otras	
Programa de una parroquia para "PROTEGER LA VIDA"	
あとがき	カリタスジャパン担当司教 幸田和生 42
注記	43
お知らせ 社会系委員会発行物のご案内	44
2011 年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	46

四旬節愛の献金

キリストへの信仰に生きるものにとって、愛の業は欠かすことができないものです。教皇ベネディクト十六世は、回勅『神は愛』において、次の３点が教会にとっての本質であると述べています。「神のことはを告げ知らせることとあかし、秘跡を祝うこと、そして愛の奉仕を行うことです（25）」

教会の伝統は、四旬節に祈りと節制と愛の業という３点をもって、信仰を見つめ直すように求めています。日本の司教団も、四旬節の精神に一人ひとりがよりふさわしく生きることができるように、愛の業の実践を求めています。カリタスジャパンが担当するこの四旬節献金は、緊急災害援助にとどまらず、国内外において危険にさらされているたくさんの「いのち」を守るために役立てられ、さらには少数民族の子どもたちの教育支援や女性の自立支援などの長い時間をかけて実施される支援にもあてられます。神から与えられたたまものである「いのち」が、ふさわしい尊厳を与えられるために、努力を続けております。このカリタスジャパンが行う支援は、皆様の募金に支えられています。とくにその約３分の１は、四旬節献金によって支えられています。

今年の四旬節にも、あなたの分かち合う愛の心が世界の多くの人に届きますように、四旬節献金にご協力ください。

2011年３月９日 灰の水曜日

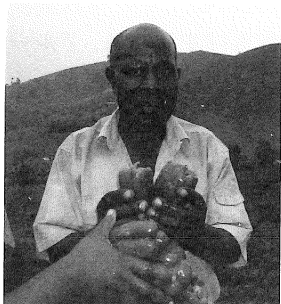
カリタスジャパン責任司教 タルチシオ 菊地 功
担当司教 ヤコブ 幸田和生

2010 年四旬節キャンペーン報告 (2009 年 9 月～2010 年 8 月)

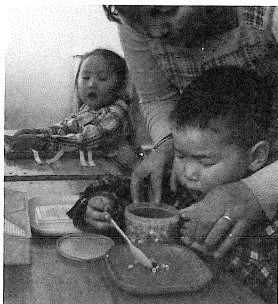
四旬節献金総額 66,180,839 円

主な援助先		(円)
インド	被差別層女性の権利向上プログラム	9,281,000
スリランカ	平和構築支援	1,843,200
スリランカ	女性移動労働者支援	1,797,400
カンボジア	地域医療支援	2,617,500
カンボジア	若者職業訓練支援	2,617,500
パキスタン	住民によるコミュニティ開発プログラム	4,627,000
パキスタン	アフガン難民教育支援	3,699,090
パキスタン	地域保健支援	1,495,822
バングラデシュ	少数民族教育支援	12,000,947
モンゴル	幼稚園支援	4,490,000
ウガンダ	持続的農業支援	2,463,955
イラク	母子保健支援	4,546,000
ヨルダン	イラク難民と移動労働者支援	2,718,900
東京教区	日韓子どもの平和交流	280,000
名古屋教区	子どもの虐待防止ネットワーク	200,000

ウガンダ



モンゴル



カンボジア



この冊子の使い方

- ・この冊子は、四旬節の間、自分たちの生活や現代の社会を見つめ直し、悔い改め、主の復活をふさわしく迎える準備のためのものです。主キリストの復活と共に、私たちがより神のみ心になった生き方へと変えられていくことを目指しています。
- ・四旬節の間、一週間に一つずつ、主日の福音に合わせて読みます。四旬節第1主日に第1の話を、第2主日に第2の話をという具合です。受難の主日に、第6の話を読みます。
- ・それをさらに深めたい方のために、「ふりかえり」のページがあります。これはグループでも、個人でも使うことができます。
 - 1) まずは、話を読んで心に響くところを味わいます。グループの場合は、感想を分かち合うとよいでしょう。

次に、自分の生活と社会を見つめ直します。ヒントを参考にして、ふり返ってみましょう。グループの場合は、それをまた分かち合うとよいでしょう。
 - 2) そして、もう一度、主日の福音を読みます。話と結びつけたヒントがあるので、主日のミサの時と違う響きがあるかもしれません。グループの場合、少し沈黙して黙想する時間を入れてもよいでしょう。
 - 3) 最後は祈りで締めくくります。もし特別に気になっている人がいるならば、その人のために心を込めて祈りをささげましょう。グループの場合、簡単な祈りで終わってもよいし、ロザリオの祈りや十字架の道行と組み合わせてもよいでしょう。

英語、ポルトガル語訳のご案内

今年は第3話「人と人をつなぐー『いのちを守る』」ための小教区での取り組み」をスペイン語に翻訳して掲載しました。

英語、ポルトガル語も翻訳しましたが、小冊子に掲載するのは紙面の都合上難しいため、ホームページからダウンロードできるようにしました。英語圏、ポルトガル語圏のお知り合いの方にご案内ください。

Este año, la tercera charla “Uniendo a unas personas con otras: Programa de una parroquia para PROTEGER LA VIDA”, ha sido traducida y publicada en español.

También la hemos traducido al portugués e inglés, pero sin publicarlas por las dificultades inherentes al uso del papel. Sin embargo, pueden acceder a estas traducciones y bajarlas desde nuestra página web. Por favor, informen a sus amigos y conocidos de habla inglesa y portuguesa.

This year, the Spanish translation of the third article “Connecting People with People: A Parish Activity to Protect Life” is printed in the booklet.

Although the article was also translated into English and Portuguese, it is impossible to print them in the booklet due to limitations of space. Therefore, they are posted on our homepage to be downloaded. Please inform your friends and relatives in English or Portuguese speaking countries about them.

Este ano apresentamos as tres reportagens das atividades que as Igrejas se empenham para “Resguardar a vida”, unindo entre as pessoas.

O texto foi traduzido em inglês e português. Por falta de espaço no livrinho, colocamos em Home Page que poderão fazer download. Apresentem a seus amigos e conhecidos.

URL	英語 English	http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2011_en.pdf
	ポルトガル語 português	http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2011_pt.pdf

愛の業、その主役は誰か

一人ひとりが神の召し出しに応えることができるように

昔の写真を眺めていて愕然^{がくぜん}とした記憶があります。20年以上も前の話です。その頃私はアフリカのガーナという国で働いていました。当時は首都アクラ教区に所属していたものの、電気も水道もない山奥にある教会で、主任司祭を務めていました。ガーナには言葉も文化も異なる伝統的な部族が多く存在していますが、私が働いていた地域も弱小ながら伝統文化を守る一つの部族の居住地となっていました。愕然としたのは、その部族について研究した博士論文に添付された写真を目にした時のことです。

論文執筆のための調査はガーナ独立の頃、すなわち1950年代に行われたもので、当然そこに添付された写真も、その当時のものに違いありません。写真の光景は、豊かな農産物が並ぶことで全国的に有名な近くの村にある市場の光景でした。どうして驚いたのかといえば、そこに描かれた光景が古さを全く感じさせない、見慣れた光景だったのです。それはつまり、その地において30年以上も時間が経過しているにもかかわらず、市場の光景や人々の服装に、変化がまったくなかったということを意味しています。添付された写真の数々は、30年という時間の流れが、それほど大きな変化をアフリカの奥地にもたらさなかったことを私たちに語りかけています。

この驚きの体験からさらに20年以上が経過した昨年夏、司祭叙階式を司式するためにガーナに招かれました。首都アクラはめざましいほどに発展し、背の高いビルも建ち並び、街中には広々とした道路が通り、加えて新たな道路建設が進んでいました。街行く人々の多くが携帯電話

を握りしめ、忙しそうに連絡を取り合う姿は、それこそが発展の証しなのかもしれません。首都の姿は、この国が著しい発展を遂げたと確信させるものでした。

しかしそれが単に錯覚であることは、首都を出て奥地の村へと入っていった時に、即座に理解されます。発展を遂げたように見えるのは都市部だけのことで、奥地の村では20年前と全く同じような生活が続いているのです。人々の住まい、地域の様相、服装、そして、日々の生活。そこに発展の証しを見いだすことはできません。そのことはつまり、50年以上前からほとんど変わることもなく、人々の生活の厳しい現実が続いているということを意味しているのです。

ガーナからの帰りに立ち寄ったヨーロッパの空港で、書店に並んだある本に目が釘付けになりました。ザンビア出身のダンビサ・モヨの著書『Dead Aid (死んだ援助)』は、この半世紀、世界的な規模で先進国から途上国に援助が注入されてきたにもかかわらず、どうしてアフリカだけが発展から取り残されているかを鋭く指摘しています。つまり同じように援助が注入されたにもかかわらず、アジアや南米では成功を収め経済的にも発展している国があるのに、どうしてアフリカはさらなる援助を未だに必要とし、発展から取り残されてしまったのかという問題です。

2000年9月に採択された国連ミレニアム宣言〈注1:43ページ〉には、第7番目の項目としてわざわざ「アフリカの特別なニーズへの対応」という表題が掲げられていました。そこには、「我々は、アフリカにおける民主主義の強化を支持し、持続的平和、貧困撲滅及び持続可能な開発におけるアフリカの人々の努力を支援し、それにより世界経済の主潮流にアフリカを統合していく（外務省訳）」と世界の首脳の決意が述べられ、さらに「債務帳消し、市場アクセスの改善、政府開発援助（ODA）の拡大や外国直接投資（FDI）の流入増加、並びに技術移転を含む、アフリカにおける貧困撲滅と持続可能な開発の諸課題に対処するための特別な措置をとることを決意する」とまで記されているのです。あえて一つの大陸を名指したこの項目が世界的宣言に盛り込まれたということ

は、第二次世界大戦後の世界にあって、同じように世界から支援がつか
込まれたにもかかわらず、アフリカだけがよりいっそうの泥沼にはまり
込んでいったという事実を私たちに突きつけています。どうしてそんな
ことになったのでしょうか。

その背景にはさまざまな問題が複雑に絡んでいるとはいえ、究極的に
は背後にある埋蔵資源の魅力の前に、大国の倫理観は麻痺し、独裁者た
ちの存在を許し続けたことや、冷戦時代の大国の論理にアフリカの新興
独立国家が翻弄されたことが、最大の要因であると言われます。

肝心の草の根で生きている一人ひとりの生活は、顧みられることがな
かったということです。何十年たっても同じような厳しい生活を強いら
れている人々。それどころか、頻発する内戦によって、安定した生活も
居住地でさえも失ってさまよう人々。神が創造された一つひとつの大切
ないのちを、私たちの世界は、顧みようとはしなかったのです。

アフリカで生きようとする一つひとつのいのちこそが、アフリカにお
ける世界の「主役」たちです。しかし私たちは、肝心の「主役」の存在
を無視して、周りで勝手に筋書きを書き続けてきたのです。

四旬節は、「祈り」と「節制」と「愛の業」という三点をもって、信
仰を問い直す「時」を私たちに与えています。社会の現実の中であって、
私たちはさまざまな人間関係において信仰を生きていかななくてはなりま
せん。「祈りと節制」は、自分自身の内的な問題と考えることもできる
のですが、「愛の業」は、その対象となる「相手」の存在なしには
成り立ちません。すなわち、四旬節にあたって私たちが自らの信仰を顧
みるためには、自分自身の内面のふり返りとともに、自分と他者とのか
かわりの中で、「愛の業」をどのように具体的に実践しているのか、と
いう自分自身に対する問いかけが不可欠でもあるのです。「たとえ、預
言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようと、
たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようと、愛がなければ、
無に等しい（1コリ13・2）」と書かれているとおり、私たちが真
剣に信仰に生きようとするならば、そこには愛に裏打ちされた他者との

交わりにおける実践が不可欠なのです。

毎年の四旬節にあたり日本の教会は、祈りを深め愛の業への意識を高めるために、四旬節小冊子をカリタスジャパンを通じて発行してきました。社会の中にあって弱い立場に追いやられた人々、苦しみと困難の真っ直中にある人々の心からの「叫び」に耳を傾けることから始まった四旬節小冊子は、「叫び」からの「ひびき」を聴くことへと受け継がれました。そして「ひびき」を「つなぐ」ことを目指して歩みを進めてきました。

今年の四旬節小冊子は、四旬節の信仰の実践、すなわち「愛の業」に焦点を当て、特に四旬節献金が実際にはどのような現場で生かされているのかを分かち合うことを目的として編集されました。国際社会の思惑に左右される援助ではなく、草の根で生きる一人ひとりのいのちの尊厳を守るために、さらに「主役」である一人ひとりが十分に尊重されるように、カリタスジャパンが世界のカリタスと連携しながら実施している活動を知っていただきたいと思います。

教皇ヨハネ・パウロ二世は回勅『新しい課題』において、発展の意味について次のように記しています。

「発展とは、富める国が現在享受している生活水準にすべての人を引き上げることではなく、労働を結集してよりふさわしい生活を築き上げること、個々人の尊厳と創造性、そして天職、すなわち神の召し出しにこたえる力を具体的に高めることなのです (29)」

一人ひとりに与えられている神からの召命。すべての人がその生命を与えられた場で、豊かに召命を開花できるような環境は、残念ながら整えられていません。それは先進国においても貧困と格差の問題として顕著になっていますが、途上国においてその構造的貧困には目を覆うばかりの現実があります。一人でも多くの人が、神から与えられた召命に豊かに応えることができるように、四旬節の献金を通じて「愛の業」を実践してください。

＊ふりかえりのために＊

文章の中に、「自分と他者とのかかわりの中で、『愛の業』をどのように具体的に実践しているのか、という自分自身に対する問いかけが不可欠でもあるのです」とある。このふりかえりのページも、他者とのかかわりや社会とのかかわりを問い直してみよう。

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・自分が生きている社会の中で、どのような現実を意識しているだろうか。今の社会の何が問題であり、何にもっと関心を寄せるべきだと感じているだろうか。
- ・日々の生活の中で、どのように愛の業を実践しているだろうか。あるいは、していないだろうか。それは自分にとって何を意味しているだろう。

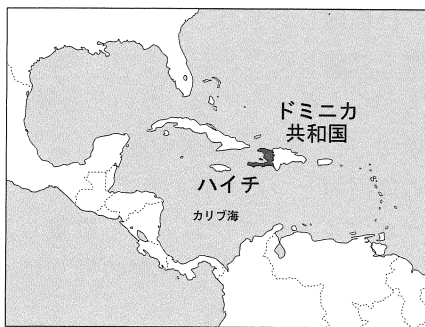
2) 主日の福音を黙想する（マタイ 4・1－11 荒れ野の誘惑）

- ・イエスは宣教活動に従事する直前、荒れ野で誘惑を受けられる。イエスのこの姿を自分の内的な問題（祈りと節制）だけでなく、社会の現実を見直してみる機会にしてみよう。
- ・第1の誘惑「これらの石がパンになるように」(3節)：物質的なことだけを優先して、心を忘れてしまった今の社会。しかもそのパンが公平に分配されることなく、開発が極端に遅れてしまったアフリカの社会。
- ・第2の誘惑「飛び降りたらどうだ」(6節)：人間の力で何でもできるという傲慢な社会。科学の発展、経済の発展は何のためか。
- ・第3の誘惑「これをみんな与えよう」(9節)：限らない欲望を膨張させて、すべて自分のものにしようとしている社会。貧しい人々、例えばアフリカの人々を置き去りにしながら、発展してきた社会。本文にあるヨハネ・パウロ二世の「発展の意味」を噛みしめてみよう。
- ・悪霊の誘惑に流されている社会に対して、イエスはどのように反対の態度をとっているだろうか。

3) 愛の業のしるしとして、祈りをささげる

苦しんでいる人々、置き去りにされた人々のために愛の業を行えるように祈りをささげよう。また、愛の業のしるしとして、必要な人々に具体的な願いをささげよう。

いつも、ともに 連帯のうちに往う緊急災害支援



昨年の1月に地震が起こるまで、ハイチは世界最貧国の一つであるにもかかわらず、あまり日本のニュースには取り上げられてきませんでした。この国は中央アメリカのイスパニョーラ島にあり、島の西側3分の1を占め、東側3分の2はドミニカ共和国となっています。

1804年にフランスから独立し、世界初の黒人による共和制国家が発足しましたが、政治的、経済的な混乱、武力紛争などが続いた上、豪雨やハリケーンなどの自然災害にも度々見舞われ、北中南米で唯一の後発開発途上国（注2:43 ページ）に数えられています。その地で、20万を超える人が犠牲となり、国民の約3分の1が被災したといわれる大地震が起こったのでした。

地震がもたらした被害

地震は、2010年1月12日、現地時間午後5時頃発生しました。震源は、首都ポルトープランスの南西約14キロメートル、深さ10キロメートル。マグニチュード7を記録した大型の直下型地震で、大統領府をはじめ、多くの建物が



倒壊した大聖堂 ©Caritas



道路にテントを張る人々 ©Katie Orlinsky/Caritas 2010

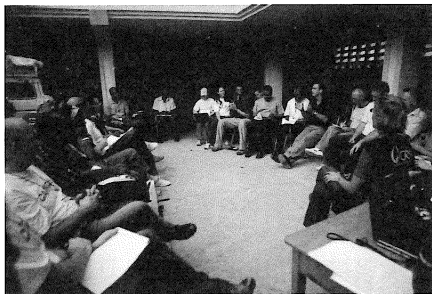
壊滅的な被害を受けた様子は、日本でもテレビや新聞で大きく報道されました。もともとハイチに現地事務所を置くカリタスアメリカによる、当日午後5時30分付けの報告によれば、彼らの事務所の壁にはひびが入り、向かいの建物は倒壊したとのことでした。また、

スタッフの一人は「これまでも地震を経験したことがあるが、今回ののは大きく、直接的な揺れだ。何千人もが亡くなったに違いない」と瞬時に思ったそうです。多くの建物の倒壊は、長く続いた社会の混乱により、手抜き工事が蔓延していたことがその原因の一つだと言われています。

10日間の間に、20万を超える人々がポルトープランスから避難し、80万ほどの人がテントの避難キャンプに入りました。首都の通りは、がれきと埃、避難民と遺体で埋め尽くされたのでした。

国際カリタスの救援活動

国際カリタスは、世界165の国と地域にあるカリタスが形成する連盟で、本部事務所をバチカンに置いています。今回のような大規模緊急災害が起こった時、国際カリタスは通常24時間以内に国際電話会議を開き、現地カリタスを中心に、対策チームを編成します。



会議を行う対策チーム ©Katie Orlinsky/Caritas 2010

ハイチ地震の場合、地震発生から11時間後に国際電話会議が開かれ、現地ではカリタスハイチとカリタスアメリカなどを中心に救援チームが編成され、すぐにアメリカ、ヨーロッパ、アフリカのさまざまなカリタスから、災害対応の経験が豊富な人材が現地へ飛びました。

緊急災害時に求められる活動は状況によって大きく変わりますが、今

回は食料と住まいの確保が急務でした。そういった支援と同時に、国際カリタスはメキシコと南アフリカの緊急救助隊を動員し、がれきの中の生存者救出作業にあたりました。通常、災害発生から72時間を超えると生存率が極端に下がるといわれますが、カリタスの救助隊は6日後に、倒壊した大聖堂のがれきの中から女性生存者を発見、救出しました。

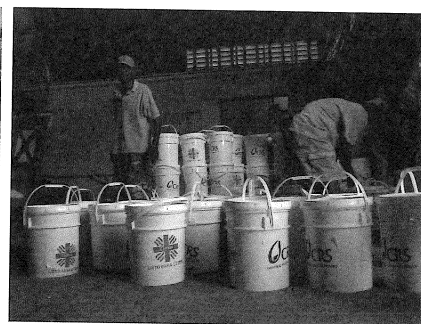


生存者救出の瞬間 ©Katie Orlinsky/Caritas 2010

災害支援には、初期の緊急支援と、中長期にわたる復興支援がともに必要です。災害発生後、カリタスの救援チームはすぐに支援活動を開始し、活動を通して支援のニーズと規模を見極め、緊急支援として約25億円のプロジェクトを立案、国際カリタスは全世界のカリタスに資金提供を呼びかけました。この緊急支援の主な内容は、物資配給所運営（調理済み食料、衛生用品、調理用具、飲料水などの配給）、診療所運営、雇用創出プロジェクト（がれき除去などの作業を通して臨時の雇用を創出する）、テント配布と避難キャンプ運営などです。



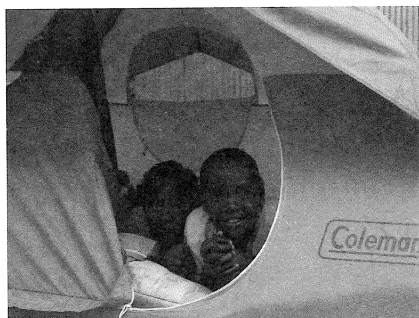
毛布、防水シート、簡易水タンクの配給
©N. Fischer/Caritas Switzerland



緊急用食料一式を準備する
©Michelle Hough/Caritas 2010



配給所にできた列
©N. Fischer/Caritas Switzerland



テントに入る子どもたち
©Michelle Hough/Caritas 2010

教会と人々との連帯

カリタスは、カトリック教会のさまざまな組織と連携して活動します。例えば、ハイチ地震では簡易診療所を複数立ち上げ、以前から現地で看護師として働いていたシスターや医師の協力の下、多くのけが人を治療しました。倒壊しなかった教会は避難所に、教会の青年会はボランティア組織になります。もともとそこで社会に奉仕して生きる教会は、緊急時にあっても強いのです。



簡易診療所で働くシスター ©Katie Orlinsky/Caritas 2010

カリタスの緊急災害支援について説明する時、よく次のように言われます。「カリタスは、災害が起こる前も、起こっている間も、起きてからも人々とともにいる」

カリタスハイチはこれまで35年にわたり、緊急災害や開発、社会正義などの分野で草の根活動を続けてきました。全国10の教区に事務所を構え、スタッフ、小教区司祭、そして地域のボランティアたちとともに、助けを必要としている人々のために働いています。今回、スタッフは地震が起こる前までは貧困削減に取り組み、地震が起きた時は一緒に被災し、地震後の今は、緊急・復興支援に取り組んでいます。そして今

後、復興が終わっても、ずっと現地で活動を続けます。人々とともに、連帯のうちに。

* ふりかえりのために *

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・ハイチの援助活動を通して、何が心に響いただろうか。
- ・カリタスの援助方針「連帯」から何を学べるだろうか。
- ・日本でも災害は頻発している。身の回りに災害が起きた時、どのようなつながりをこころがけたらよいだろうか。

2) 主日の福音を黙想する(マタイ 17・1-9 主の変容)

- ・まずこの福音を読んで、イエスの不思議な変容の姿を想像してみよう。これは十字架の死を通して、復活した栄光の姿をあらかじめ示している。イエスの貧しさや苦しみに連帯することによってこそ、この栄光の姿にあずかることができる。
- ・貧しい人々に徹底的に連帯するからこそ、真の援助が成り立つ。「災害が起こる前も、起こっている間も、起きてからも人々とともにいる」という姿勢から学ぶことは。
- ・神の栄光に達するために、苦しんでいるイエスとどこまでともにいることができるのか。真の救いに達するために、貧しい人々とどのように連帯することができるのかを改めて問いかけてみよう。

3) 連帯の祈りをささげる

今、一番心にかかっている貧しい人や苦しんでいる人との連帯のしるしとして、私たちの祈りをささげよう。

ハイチ地震の募金呼びかけに対して、多くの方から募金をいただきました。感謝申し上げます。カリタスジャパンはこれからも引き続き、ハイチの復興に対する支援を続けてまいります。

人と人をつなぐ

「いのちを守る」ための小教区での取り組み

2008 年秋、リーマンショックといわれた経済危機が日本にも及び、派遣労働者の失業が大量に発生したことなどにより、いのちの危険に直面する人が増える恐れが広がりました。2009 年 1 月、日本カトリック司教協議会社会司教委員会は、「2009 いのちを守るための緊急アピール」〈注 3：43 ページ〉を発信し「この緊急事態にあたり私たちに何ができるかを考え、日本各地で支援の活動が広がり、多くの人がその活動に参加・協力することを願っている」と呼びかけました。このアピールを受け、カリタスジャパンは「いのちを守るための緊急募金」の受け付けを開始し、集まった募金をもとに各地の支援活動を後押しする援助を行いました。これまでに「いのちを守るための緊急募金」から国内で援助した件数は 24 に及び、その大半は、派遣切りや解雇などで仕事や住む所を失い、生活に困窮する人たちへの食事の提供、医療の提供、生活相談などでした。この援助先の一つに、東京・四ッ谷にあるカトリック麴町（聖イグナチオ）教会で開設された、生活困窮者のための「聖イグナチオ生活相談室」があります。ここではその活動を紹介します。

小委員会を立ち上げた

麴町教会では、アピールに応じて 10 人程度の「いのちを守る小委員会」を立ち上げ、貧困状態にある人やさまざまな問題を抱えて生活する人たちに何ができるか考えました。それ以前も野宿の人におにぎりを手渡したり、食事の炊き出しをするなどの支援活動が行われていましたが、この小委員会はその関係者だけでなく、それまでそのような活動に関係していなかった人、外国人、信者でない人も加わって構成されました。2

月から毎月話し合いの場を持ち、5月には学習会を実施しました。学習会では、派遣切りなどで仕事を失い生活に困窮する人が、想像を超えるほど激増していること、また、そのような人々への生活相談は、行政の窓口やNPO団体でも実施しているが、相談に来る人の数が急激に増え、どこも対応に追われていることなどを学びました。また、生活に困って麴町教会を訪れる人がいるという現実もありました。小委員会ではこういった実状を踏まえて話し合った結果、生活困窮者のための生活相談室を開設することを決定しました。

約 150 人が相談室を訪れた

生活相談室は、月曜日 10 時から 12 時までと、土曜日 13 時から 17 時まで開かれています。月曜日の午後は福祉事務所への同行など具体的な支援活動に時間を割いています。相談室では 9 人のボランティアスタッフが参加していて、そのうちの 4 人は精神保健福祉士や社会福祉士の資格を持っています。開設以来 1 年（2010 年 8 月現在）で約 150 人がこの生活相談室を訪れました。年齢構成は 50 歳代と 60 歳代で約 60% を占めますが、30 歳代以下も約 20% を占めています。スタッフの A さんは、「相談に訪れる人には 3 つのパターンがある」と言います。1 つ目は、すでに長く野宿生活をしている人、2 つ目は、派遣切りや解雇で仕事や住むところを失った人、3 つ目は、病気や障がいを持っていることで生活に行き詰まった人たちです。実際相談に訪れた人で最も多かったのは、野宿生活をしている人です。月曜日に教会で行っている炊き出しに来た人が、そのまま相談室を訪れたり、教会なら相談にのってもらえるだろうと訪ねてきた人などです。また、スタッフの A さんはこの一年間をふり返り「最初は野宿の人がほとんどでしたが、最近の傾向として女性や若い人の相談が増えてきている」と話しています。

ある女性の例です。組織の中堅職員として働いていましたが、仕事がどんどん忙しくなる一方で職場環境は改善されず、とうとう鬱病になり仕事を辞めざるをえなかったのです。その後は雇用保険と貯金で生活してきましたが、それも底をついたので、生活相談室を訪れました。な

んとか生活保護で生活を立て直すことができ、時間をかけて治療に専念した結果、体調も良くなり再就職して働きはじめた、ということでした。

また、ある若者の例です。地元で卒業後、仕事を探しましたが、正社員での仕事が見つからず臨時社員として働き始めました。しかし、収入は不安定で親にも頼れない状況にあったため、首都圏の方が就職口が多いと思い、上京して仕事を探しました。しかし正社員としての仕事を見つけることはできず、アルバイトや派遣の仕事に就いたのですが、安定した収入を得ることはできませんでした。公的機関に支援を求めたこともありましたが、「若いから」とか「親がいるから」との理由で支援を受けることはできませんでした。とうとう貯金もなくなって、偶然インターネットで生活相談室の存在を知り、半信半疑で訪ねてきました。相談室のスタッフから丁寧な対応を受け、この若者は「この世の中にこんな人たちもいるんだ」と語っていました。その後職業訓練を受ける機会に恵まれ、新たな仕事に就くことができた、ということでした。

周りとの連携が重要

この相談室は教会の活動として始めましたが、「教会の中の人だけでは限界があるので、周りとの連携が重要」とAさんは話しています。スタッフが相談にのって話を聞くだけでは問題は解決しないことが多いのです。相談に来る人が直面している問題はさまざまで、その問題を一つずつ解決するための具体的な取り組みが必要となります。しかし、限られた相談室のスタッフだけでは十分な対応が難しいので、近くで生活困窮者支援に取り組む社会福祉関係者、弁護士、司法書士、医療関係者、行政の職員などと連携できる体制を日頃から作っておいて、問題内容に応じて適切な人につなぐようにしています。また、この相談室ではシェルター（緊急な場合の宿泊施設）を持つ団体とも連携しています。相談室にたどり着いたものの体が衰弱している人には、まずゆっくり休してもらってから相談を始めます。また、土日など行政が休みとなる期間や生活保護が開始するまでの間、仮の住まいとして使ってもらいます。緊急時にはシェルターが非常に重要な役割を果たします。

精神的サポートの必要性

スタッフのBさんは「生活保護の申請では、住居がないという物理的な問題を解決することはできるが、その人の尊厳を回復しきれないことが多い」と話しています。相談者の中には、心の病によって生活に行き詰まったり、あるいはその逆に長い貧困生活で心の病になった人もいます。相談に来る人は、家族や友人など、困難な時に話を聞いてくれる人がいないというように、つながりが遮断されている場合が少なくなく、ますます心の問題から抜け出しにくいことがあると言います。

こういった状況が分かるにつれ、相談室では、生活保護を受給開始した後も相談者が孤立化しないように、スタッフが継続して訪問し精神的な支えとなるような取り組みを行っています。また、相談に訪れた人たちの集いの場を月一回開催しています。そこは、一人暮らしで話をする機会の少ない人や悩みを感じる人などが、毎回数人ずつ招待され、自分の生活の様子や問題などをスタッフも含めて話し合える場となっています。

活動2年目を迎えて

相談室の活動は2年目を迎えましたが、国内景気に依然不透明感が漂う中、訪れる人は後を絶ちません。今後の活動を見据えてBさんは「増え続ける相談者にどう対応するか、そのためのスタッフをどう確保するかは頭の痛い問題です。また、相談対応後の支援の充実も考えると、いろいろ課題もあります。でも、教会が訪れる人を排除するのではなく、支援を必要とする人とかかわり、安心できる場を提供できるよう取り組みを続けていきたいと思います。それをキリストは望んでおられるのではないのでしょうか」と語っていました。

ふりかえりのために

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・小教区の取り組みの実例を読んで、何を感じただろうか。
- ・支援には、具体的な救済と、人間として大切なものの回復の両面が必要である。自分ができる支援はいったい何だろうか。
- ・さらに自分の教会で「いのちを守るための緊急アピール」に応じて、何ができるだろうか。あるいは今すでにかかわっている活動を見直してみよう。
- ・できれば「2009 いのちを守るための緊急アピール」を読み直してみよう。

2) 主日の福音を黙想する（ヨハネ4・5－42 サマリアの女）

- ・サマリアの女は5人の男性と結婚歴があり、今は6番目の男性と同棲中である。そこには愛と生活に困窮した過去と現在が感じられる。生活の困難だけでなく、心の渇きもあったに違いない。
- ・この困窮者である女性がイエスとのかかわりでいやされ、元気を回復し、町の人々にイエスを宣べ伝えるまでに変えられていく。この女性の変化を味わいながら、人間が困難から立ち直っていく過程を見つめてみよう。
- ・まわりで苦しんでいる人々がどのようにして人間性と生活を回復していけるだろうか。

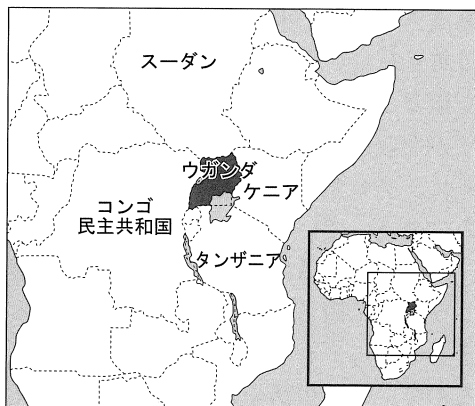
3) 生活困窮者のために祈りをささげる

自分のまわりに生活に行きづまり、苦しんでいる人がいないだろうか。
その人々のために祈りをささげよう。

小さくて、大きな気付き

自分たちの手で生活を変える

ウガンダは、東アフリカにある、日本の本州より少し大きい国です。北はスーダン、東はケニア、南はタンザニアとの間にビクトリア湖があり、西はコンゴ民主共和国と国境を接しています。国土の標高が平均1,100メートルで、雨と肥沃な大地に恵まれ、国民の80%が農業に従事しています。しかし、その多くは小さな家庭農園しか持たず大変貧しい生活を強いられています。



地方の小さな農家



丘陵地帯のバナナ畑

テレサさんは、ウガンダ南西部、カバレの丘の上にある小さな村で、バナナ畑を運営しています。バナナ畑といっても、子ども二人と一緒に世話できるほどの小さなものです。ウガンダの人の主食はバナナ（イモに食感が近い、加熱して食べる調理用バナナ）ですが、この畑の収



ウガンダの子どもたち

穫だけで、何とか家族が食べる量をまか
なっています。しかし、野菜やほかの食
物を摂ることが少ないので、常に栄養が
偏っている状態です。また、嵐がくると、
バナナの木はばたばたと倒れてしまい、食
べる物にも困るようになります。現金収入
はほとんどなく、子どもは何とか小学校を
卒業させても、中学校や高校に行かせることができません。テレサさん
は毎日薪拾いや食事作りに忙しく、あまり子どもの世話や畑仕事に時間
を取ることができません。夫は大きな町に出稼ぎに行ったのですが、わ
ずかな収入を酒代に使ってしまい、送金はほとんどありません。このよ
うに、テレサさん一家は、困窮した生活と家族の分断という2つの苦し
みにあえいでいます。

こうした生活はウガンダの地方の小規模農家では典型的なもので、テ
レサさんに限らず周りの人々も、ずっと前から同じような生活を続けて
きました。テレサさんたちにとって、これはごく当たり前の日々の営み
なので、この生活を自分たちの手で変えることができるとは思ってもし
ませんでした。

カリタスウガンダの活動に参加して

そんなある日、テレサさんは、カリタスが村で始めた農業改善グルー
プの話を聞き、これに参加することにしました。自分が住んでいる家で、
持っている小さな畑で、生活をより良くしていくことができるというの
です。このグループに参加してテレサさんは、バナナの収穫を増やす栽
培方法、栄養事情を改善するために家庭菜園で野菜を作ること、身の回
りの衛生環境を改善する方法、薪の消費が少ない改良かまどを使うこと
で、薪拾いに行く時間を節約できることなどを学びました。それらは、
何か物をもらったり、お金をかけたりして行うのではなく、教えてもらっ
た知識と、自分の身の回りの物で簡単にできることでした。

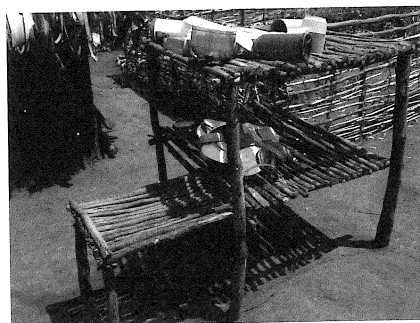
テレサさんは早速それらを実行してみました。その結果、バナナの収



小さな家庭菜園



効率的な改良かまど



食器乾燥棚



テレサさん（中央）

量は倍近くになり、余った分を換金できるようになりました。そのお金で今子どもは中学校に通っています。家庭菜園で作る野菜で家族の健康状態も改善しました。夫は出稼ぎから帰ってきてともに畑で働き、一家は農業で生計を立てていけるようになりました。テレサさんはこれまで一人でこなしていた薪拾いや畑仕事、家事に費やす時間を短縮することができたことで自由に使える時間が増え、家族とのコミュニケーションも増えました。夫は家族で協力し合って働くことが収入増加につながり、家族の絆も深まることを実感し喜んでいます。テレサさんは、今度はグループの仲間と一緒に、新しくグループに入ってきた人や友達に、自分が学んだことを伝えていっています。

一番大切なこと

カリタスウガンダの責任者であるヌダミラ師は、「人々が『自分で自

分の生活を変えることができる』と気付くことが一番大切であり、それは生活そのものの改善よりも、もっと大きな変化である」と語っていました。「そのことに気付いてしまえば、後は自分たちで何とでもしていけるし、こちらが何もしなくても、活動は自然に広がっていく」と。



ヌダミラ師（左）

実際、この取り組みの中で起こったことですが、バナナの収穫量が激増し、市場での価格が大幅に下がってしまったのです。そのためグループのメンバーはバナナを売っても子どもを学校に送るのに必要な現金収入を得ることが難しくなっていました。この時も彼らは、畑を広げて野菜を増産して売ったり、市場ではなく道ばたに店を出したりして、それぞれ自分たちで対応していったそうです。

ヌダミラ師はまた、「こうした気付きが人々の間に広がっていくためには、しっかりとした知識を持ち、地元の社会に精通し、何より根気強く、愛を持って、人々とともに生きていくスタッフが必要」とも語っていました。

地域に根ざしたカリタスの活動、そして人と人とのつながりが、人の生を豊かにし、自立へと導いているのでしょう。

ふりかえりのために

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・このウガンダの取り組みを読んでみて、何を感じただろうか。
- ・人々が「自分で自分の生活を変えることができる」と気付くことが一番大切と語っている。その気付きを伴う援助はどのようなことが大切だろうか。
- ・自分の周りの生活をふり返ってみよう。「自分で自分の生活を変える」ことができることはないだろうか。

2) 主日の福音を黙想する(ヨハネ9・1-41 盲人のいやし)

- ・この長い物語では、盲人は単に目が見えるようになるだけでなく、イエスを主として礼拝するまで導かれる。真の信仰者としての自己確立まで導かれる霊的成長の話である。
- ・この盲人は「わたしがそうなのです」(9節)と言って、自分自身を肯定している。彼は「自分で自分の生活を変えることができる」人間へと変えられていったのである。
- ・この盲人の成長を見つめながら、人間が成長していくというのはどういうことか。そのような成長の手助けをされるイエスの援助の姿勢を静かに黙想してみよう。

3) 気付きを深める祈りをささげる

自分の周りで家族とのかかわり、仕事のかかわりで苦しんでいる人思い浮かべ、彼らのために祈りをささげよう。「自分で自分の生活を変えることができる」ように、その困難を工夫しながら、乗り越えていけるように。

教会が生きる支えになるために

「カトリック教会における自死についての意識調査」より

カリタスジャパン啓発部会〈注4:43 ページ〉では、2007 年から「自死と孤立」のテーマに取り組んできました。「自死（自殺）」は今の日本社会が抱えている様々な問題の共通の原因ともいえる「孤立」の悲劇的結末であること、また、カトリック教会の中ではタブーのように扱われ、あまり語られないものの、私たちにとって決して遠い問題ではないと考えたからです。

部会として、自死が教会においてどのように考えられているのかを調べ、問い直す必要性を感じ、2009 年 7 月、全国 81 の教会の信徒および修道者、司祭の方々にご協力いただき、「カトリック教会における自死についての意識調査」を行いました。調査では主に、「自死を身近なこととして経験したことがあるか」「自死をどのように思うか」そして「どのように自死について取り組んでいったらよいか」などを問いかけました。

意識調査の回答は 3,473 通に及びました。調査票一面にびっしりと記述されたもの、言葉は少ないものの決意のようなものが伝わってくるもの、何度も書き直した筆跡が残っているものなど、思いが込められた 3,473 通りの返答をいただきました。今まで話せなかった胸の内を、勇気を持って表わしてくださった方、書簡や電話で伝えてくださった方もいました。ご協力くださった方々には、この場を借りて、心より感謝申し上げます。ここでは限られた紙面ですが、その一部を紹介させていただきます。（プライバシーにかかわる部分は、一部省略・改編しています）

* * * * *

「信仰ゆえに必要以上に教会の教えに忠実であろうとして、自分を束縛し、追い詰められてゆく人がいるかもしれません。この面について取り組まねばならないのではないのでしょうか。自死は罪というだけなら無責任だと思います。自死の第一の原因は孤立し、精神的に追い詰められてしまうことだと思います。孤立しないため、させないために、深く考え行動していかななくてはならないと思います。そして今は、相手に遠慮しすぎてはならない時もあると考えるようになりました。自死はとても悲しいことです。死ぬほどの思いをしている人に、どう寄り添えるか、難しい課題です。このアンケートで、この問題を考える時をいただきました。ありがとうございました」

「教会の神父様にお話しし、家の方で通夜と葬儀を致しました。たくさんの方が来てくださり、無事葬儀を終えたのは神父様のおかげです。(中略) 私も死にたいと思うことがありましたが、カトリック信者は、それはいけないことだと自分にいつも答えています。教会の横のつながりよりも、神父様にゆっくりと相談できるように、日頃から心がけると良いと思います。それを受け止めてくださる神父様もご多忙ですが、よろしくお願い致します。本日教会でこの用紙をいただきまして初めて家族の自死について思い切りのことを書きました。毎日後悔して暮らしておりましたが、思い切りのことを書いて、気持ちが少し晴れたような気がします。ありがとうございました」

「当時は『教会で御葬儀ができない』と心配しましたが、その時の主任神父様、助任神父様の配慮で『自死』とは公表せずに教会で葬儀が行なわれ、安心しました。^{うつ}鬱病の末の自死であったので、その話を神父様に話したら『それは病死だよ。辛かったね』と言っていただき、とてもほっとしました。私自身は必要以上に同情されたくもなかったのですが、どちらかと言えばそっとしておいてほしいことが多かったのです。その点、神父様方はこちらが話せば答えてはくれますが、基本的には放っておいてくれたのでありがたかったです。ただ、罪の意識が強すぎて（本人に

しろ遺族にしろ)話したいのに話せないという人もいると思うので、『大丈夫だよ。安心して』と言ってあげる土壤がほしいと思います」

「子どもの自死も、深い悲しみを救ってくださったのは当時の司祭。深い信仰に基づいた癒^{いよ}しの言葉をいただいて立ち直ることができました。また信徒の皆様の支え、祈りにより、私の人生の大きな傷が癒されました。自分の経験から『祈り』が大切だと思います。遺族のために『祈り』続けることが信徒の唯一の使命だと思います。自死に迫りやる社会状況を改善することが信徒各自に求められています。私自身は祈り、支えることと、その人を心から支えることができたと思います。自死について話し合う機会を持ちたいですね」

「命の尊さを伝えていく、ということ言えば、今よりもできることはあまりないのではないかと思う。『自死はいけない』と訴え続けることは大事であるが、自死に至った本人の気持ちも理解し、もしかしたら通常の死より家族へのダメージは大きいので『罪人』扱いすることについては考え直していきたい」

「家族がリストラされ、それが原因と思われませんが、眠れない日が続き、精神障害となりました。『仕事がない。どうしよう』と、私が仕事から帰るのを待って、連日そのような悩みを口にしていました。病気になっているとは想像していませんでしたので、叱咤激励の日々でした。病気とわかって心療内科へ明日行く、という日に手首を切りました。どうしてよいのかわからず、入院先から司祭に電話をしましたが、特に対応はありませんでした。以来、別の病気で死亡するまで薬物中毒で数回入院しました。私は生活を支えるために働き続けました。神様に祈る以外何もできませんでした」

「葬儀は気持ちよく教会で受け入れてくれてミサ、告別式をしていただいた。死因は病死とした。カトリック教会としては遺族の望むことを

してあげること、自分にできることは、多分あまりこのことについてはふれたくないと思いますので、そっとしておいてあげる、時がたつのを待ってあげることだと思います」

「苦しんでいる時、歩み寄ってくれる神父は少ない。低レベルでも、その人にとっては、誰にも言えず、苦しいこともある。全てを受けとめてほしいとは思わないが、心をほぐす言葉をいただけたらうれしい。自死について考えることは、逆説的には生きる、生きてほしい、ということを考えることになり、とても大切に良い機会だった」

「自死、自殺の場合、友人や知人から死の原因を聞かれるのがつらい。しゃべりたくない。神父さんとの対話で心身ともに癒^いされた。神父さんより、病気を苦にした発作的な自死であるから罪ではないと言われ、精神的に立ち直ることができた」

「借金苦で自死した家族を追って、私も死を考えました。シスターがおられなければ私は立ち直ることができなかったと思います。意見らしいことは何もいわず、ただただ傾聴、受け入れに徹してくださいました。私は話すことでこんなに気持ちが軽くなり、受け入れてくださる方がいることにどんなに希望を持ったことでしょう。当人はよほどの信頼関係がないと赤裸裸に、つらく弱い自分を見せません。死を考える人が自分のことを話せるようになったらしめたもので、そうできる環境作り、信頼関係作りに日頃から心がけることが大切だと思います。（教会でも）自死に関するあらゆる知識、情報、心の持ち方、信仰などさりげなく示し、日頃から少しでも多くの方々に理解していただけるようにしたらどうでしょうか」

「答えにくい設問でした。いつか必ず越えていく『死のトビラ』です。自死に『人間の我』を感じます。悲しい『業（ごう）』のようなものを。どんなになっても「生きる」ことは賛美と感謝のような気がいたします」

ふりかえりのために

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・ 自死の意識調査の回答を読んで、何を感じただろうか。
- ・ 自分の周りにいる自死にかかわらざるをえなかった人々（自死を考えた人や、自死遺族や友人など）にどのように接したらよいだろうか。
- ・ 自分自身、「死」をどのように受けとっているだろうか。

2) 主日の福音を黙想する（ヨハネ 11・1－45 ラザロのよみがえり）

- ・ この話は、いったん死んだラザロがイエスによってよみがえる。死に打ち勝つイエスの力を示している。
- ・ 自死の誘惑に^{とら}われている人は、ラザロのように死の淵に飲み込まれてしまう。その死に囚われている人に対して、イエスは名指しして、「出て来なさい」（43 節）と大声で叫ばれる。この死を打ち消すイエスのいのちの言葉をよく黙想してみよう。
- ・ そのいのちの叫び声には私はどのように協力できるだろうか。私たちのまわりを取り囲む「死の文化」〈注5：43 ページ〉に打ち勝てるように。

3) 死にかかわる人々のために祈りをささげる

- ・ まわりで自死した人とその家族のために祈りをささげよう。
- ・ 死にかかわって苦しんでいる人々のためにも、イエスのいのちによって苦しみから解放されるように、願いをささげよう。

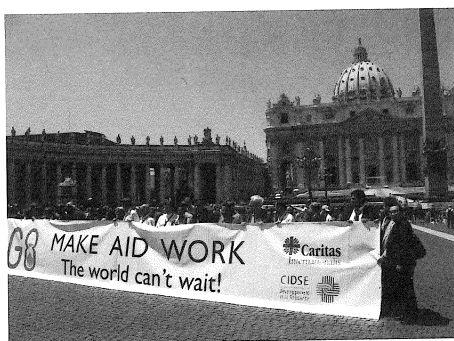
『自死の現実を見つめて —教会が生きる支えになるために—』

啓発部会では、2007 年から取り組んでいるテーマ「自死と孤立」の活動を反映した小冊子を発行しました。本小冊子には、メッセージ「自死の現実を見つめて」、日本の自死についての実態、自死についての Q&A、2009 年に実施した「カトリック教会における自死についての意識調査」報告、相談窓口などを掲載しています。



声なき人々の声を届ける

貧困の根本原因の解消に向けた「間接的」方法



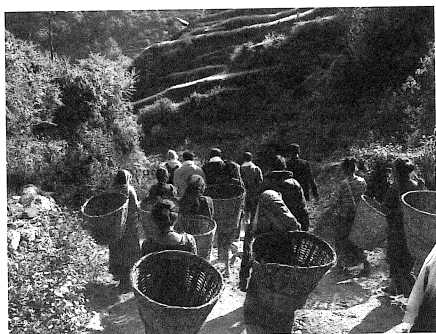
2007 年国際カリタス総会にて「援助を立て直せ」

「Voiceless people (ボイスレス・ピープル)」という言葉を知ったことがあるでしょうか。日本語に訳すと、「声なき人々」という意味になります。貧困問題に取り組む団体はこの言葉を度々、「さまざまな困難の中で、助けを求めて叫んでも誰も耳を傾けず、その声は遮断され、た

だひっそりと生きている人々」のことを指して用います。

慢性的な貧困という現実

2009 年、世界の飢餓人口は、2007 年から 2008 年にかけて起こった食糧価格高騰と経済危機により急増し、史上初めて 10 億人を突破しました〈注 6：43 ページ〉。また、世界では 5 人に 1 人が「極度の貧困ライン」と言われている、一日 1.25 米ドル未満で生活していますが、こうした状態



ネパールの農村の女性たち

にある人も、ここ数年増加傾向にあります。小学校に通えない子どもは世界全体で 7 千万人、これは世界の子どもの 10 人に 1 人です〈注 7：

43 ページ)。中等教育以上になると、女子の就学率は男子に比べて極端に低くなります。

私たちが生きるこの世界には、このほかにも人間の尊厳を損なうような問題が数多くあります。日本に住んでいるとこうした問題は遠く離れた、自分にあまり関係のないことのように感じられるかもしれませんが。しかし私たちの身の回りにある安価な衣類や携帯電話、パソコンなどの背景には、アジアで児童労働によって生産された綿や、アフリカで紛争の種となっているレアメタル（希少金属）が存在しているのです。

問題解決への取り組み

2000 年 9 月の国連ミレニアム宣言採択に続き、その翌年、世界共通の開発目標として、様々な分野の取り組みを 8 つの項目にとりまとめたミレニアム開発目標（MDGs）が策定され、2015 年までに貧困を半減させることが具体的な指標とともに定められました。

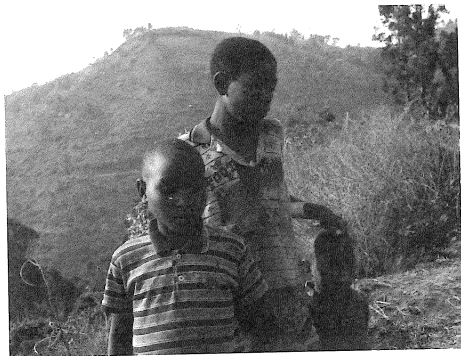
貧困とは、ただお金がないというような状態のことではありません。それは、経済的状況の他に、教育、ジェンダー（社会的文化的な性のありよう）、幼児や妊産婦の保健、感染症、環境などさまざまな要素を含み、いずれかに問題があっても人としてふさわしい生活を送ることが難しくなるのです。MDGs はそれらの要素を総合的にとりまとめ、貧困を半減させようとする世界的な取り組みです。

一般に、こうした取り組みには 2 つの方法が用いられます。1 つは直接的な方法で、例えば就学率の向上のために学校を運営する、収入を増やすために家畜を飼う、などのプロジェクトを実施することです。カリタスをはじめ多くの団体が様々な地域と分野でこうした活動に幅広く取り組んでいます。その結果、極度の貧困の中で生活していた人々が自らの力で生活全般を改善していけるようになります。

ところが、こうして少しずつでも自らの力で立ち上がっていく人々がいる傍ら、別のところでは貧困から抜け出せない人たちが多く存在しています。なぜでしょうか。それは、そもそも貧困が継続し、また生み出される原因は別にあるからです。それは、政府の機能不全であったり、

地域によっては現金収入が得られる職が十分でないことであったりするわけですが、それらの解決なしには直接的な援助活動はあまり意味のないものとなってしまいます。そこで、貧困の原因を解決するための間接的な活動が必要になるのです。

「間接的」な問題解決方法



ウガンダの少年

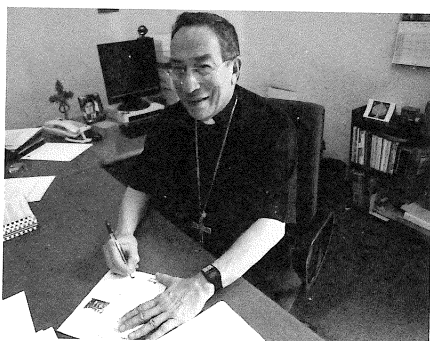
ウガンダは、他のアフリカ諸国に先駆けて、教育に力を入れてきた国です。ウガンダ政府が2000年に初等教育無償化を実施してから、子どもの約90%が初等教育を受けるようになりました。ところが政府は、激増した就学児童に学校と教師の

数、教育の質を対応させることができず、その結果、教師の負担増、生徒の学習環境の悪化、学力の低下が引き起こされてしまいました。ひどいところでは、生徒たちが朝学校に来て、1時間目の授業が始まって15分もすると、先生が「それではこれから自習にします」と言って他の学校に行ってしまい帰ってこないということもあったそうです。これは、その教師が無責任というよりは、国レベルで教師が不足しており、かつ教師の給料が低すぎ、一つの学校で教えるだけでは食べていけないということが主な原因です。子どもたちが学校に行けるようになっているのは事実ですが、これでは本当に教育を受けているとは言えません。

こうした状況を打開するために行う間接的な活動の一つが「アドボカシー（政策提言）活動」です。例えば、特に学習環境が劣悪な地域の役所の教育担当者に対して、現状を訴えるだけでなく、どのような学校運営を行えば状況が改善できるかを提言します。そうした地道な努力の繰り返しですが、根本的な原因を解消し、地域全体の教育の質を向上させていくのです。

また、アドボカシー活動は国際レベルでも活発に行われています。初等教育の充実、先ほど紹介した MDGs の 2 つ目の目標で謳^{うた}われています。すなわち世界のほとんどの国が、すべての児童の初等教育修了を 2015 年までに達成させると公約し、その進展状況が各国毎に数値で定期的に公表されるようになりました（注 8：43 ページ）。こういった世界的な取り組みは、初等教育サービスが遅れている国にその教育政策を改善する努力を促します。そして、その国の将来を担う人材育成の努力が、ひいては総合的な貧困削減へとつながっていくのです。

国際カリタスも、アドボカシー活動を通して世界の様々な問題の解決に取り組んでいます。国連経済社会理事会の総合諮問資格〈注 9：43 ページ〉を有し、ニューヨークの国連本部前に事務所を構え、あらゆる分野の社会問題について会議で発言したり、各国からの国連大使を訪れ MDGs 実現に向けた政策提言をしています。



G8 洞爺湖サミットで、日本の首相あてキャンペーンはがきにサインする国際カリタス総裁 ©Caritas/Carofei

一人ひとりの声

こうした取り組みは、国なら国が、支援団体なら支援団体が行えばそれでおしまい、というたぐいの活動ではありません。一人でも多くの人が同じ問題を認識して、ともに声を上げることが大切です。

「今日も学校に行ったら、先生が途中でいなくなっちゃった」。今までお母さんしか聞いてくれなかったこの小さな声に、耳を傾けてみましょう。「私はここで聞いているよ。あなたのことを思っているよ」。そのような気持ちが世界の問題を解決していくのです。

ふりかえりのために

1) 生活と社会を見つめ直して

- ・カリタスの活動を改めて読んでみて、何を感じただろうか。
- ・『つなぐ』を読み進める中で、この社会のどのような「声なき人々」の声が聞こえてきただろうか。
- ・「声なき人々」とともにどのように声を上げていったらよいだろうか。苦しんでいる人々をどのように救いへとつないでいったらよいだろうか。

2) 主日の福音を黙想する(マタイ 27・11 - 54 イエスの受難)

- ・イエスが十字架に至るまで、徹底的に自分をささげる姿を黙想しよう。
- ・それに合わせて、世界中で苦しんでいる人々とも心を合わせてみよう。彼らも「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(46 節)と嘆いていることだろう。彼らの「声なき声」を聴いてみよう。

3) 十字架上のイエスと心をつなげて、祈りをささげる

十字架上のイエスの苦しみを思い、苦しんでいる人々が苦しみを乗り越え、復活の喜びに達することができるように祈りをささげよう。

UNIENDO A UNAS PERSONAS CON OTRAS

Programa de una parroquia para "PROTEGER LA VIDA"

En el otoño del año 2008, la crisis económica llamada Shock Lehman golpeó también a Japón y, como un gran número de trabajadores subcontratados perdieron sus empleos, se extendió el miedo a que peligrase la vida de muchísima gente. En enero de 2009 la Comisión Episcopal de Pastoral Social de la Conferencia Episcopal de Japón publicó el [Llamamiento urgente para proteger la vida- 2009] que decía: "Deseamos que, en esta urgente situación, se reflexione sobre qué podemos hacer, se amplíen las actividades de ayuda en cada lugar del país, y en estas actividades participen y colaboren el mayor número posible de personas". Caritas-Japan acogió este llamamiento y propuso una "Colecta urgente para proteger la vida". Con los donativos recibidos ayudó económicamente a los proyectos de ayuda que lo solicitaron. Hasta el momento, con el dinero recogido en esta "Colecta Urgente para Proteger la Vida", se han atendido 24 lugares diferentes, especialmente en situaciones en las que por falta de trabajo y vivienda, se necesitaban alimentos, cuidados médicos o consultas de diversos tipos. Uno de estos puntos de ayuda fue la "Ventanilla de Consultas San Ignacio", que abrió la iglesia de Kojimachi (San Ignacio) en Yotsuya, Tokio. Vamos a presentarles sus actividades.

FORMACIÓN DE UN COMITÉ

En la iglesia de Kojimachi, respondiendo al llamamiento de la comisión episcopal se reunieron unas 10 personas y formaron el

“Comité para la defensa de la vida” para ver qué se podía hacer ante los problemas de las personas en situación de extrema pobreza. Antes de esto ya existían actividades de ayuda directa a los necesitados: se hacían “onigiri” (bolas de arroz) y se distribuían entre las personas que duermen en la calle, y también se repartían comidas. Pero en este nuevo comité participaron no sólo las personas que colaboraban en las anteriores actividades, sino otras que no habían participado antes, además de extranjeros y no cristianos. A partir de febrero se reunieron una vez al mes para intercambiar impresiones, y en Mayo tuvieron una reunión de estudio y profundización. En ella se dieron cuenta de que el número de trabajadores eventuales despedidos y con graves problemas, aumentaba alarmantemente y que aunque había posibilidades de consulta en oficinas oficiales y de Organizaciones sin ánimo de lucro (NPO), éstas no daban abasto ante el crecimiento de solicitudes. También había personas en extrema necesidad que buscaban directamente ayuda en la iglesia de Kojimachi. El Comité discutió esta situación y como resultado decidió abrir una ventanilla de consultas para personas en extrema pobreza.

UNAS 150 PERSONAS HAN ACUDIDO A LAS CONSULTAS

La ventanilla de consultas trabaja los lunes de 10 a 12 y los sábados de 13 a 17. Los lunes por la tarde se suele acompañar a las personas que lo necesitan a las oficinas de asistencia social y otros servicios concretos. Hay un equipo de 9 voluntarios para responder a las consultas, de los cuales 4 tienen el título de asistentes sociales o asistentes sociales con capacitación en salud síquica. Desde su apertura en Agosto de 2010 se han acercado a la ventanilla 150 personas. El 60 % de estas personas, tiene una edad de entre 50 y 60 años. Y hay un 20% formado por personas de menos de 30 años. “A”, miembro del equipo de voluntarios nos dice “Los que vienen a Consultas pueden

dividirse en tres grupos. El primero está formado por personas que están viviendo en la calle durante mucho tiempo. El segundo son los que han perdido el trabajo y la residencia recientemente; y por último están las personas que por tener una enfermedad o minusvalía se encuentran en una situación sin salida". De hecho el grupo más numeroso de los que buscó apoyo en las consultas fue el de los "sin-techo". Los que los lunes van a recibir un plato de comida caliente a la iglesia suelen pasar por la ventanilla para preguntar si la iglesia puede atenderles en sus problemas. Y sigue explicando "A": "Al comienzo la mayoría de los que pedían consulta eran personas que vivían en la calle, pero últimamente están aumentando las mujeres y los jóvenes"

Tomemos el ejemplo de una mujer. Ella estaba trabajando en una empresa con una responsabilidad de nivel medio. El trabajo aumento considerablemente sin que mejoraran las condiciones laborales, y acabó cayendo en una profunda depresión por la que tuvo que dejar el trabajo. Vivió durante algún tiempo con el dinero del paro y sus ahorros pero habiendo tocado fondo se presentó a la ventanilla de consultas. Gracias a la ayuda social pudo rehacer su vida, y después de recibir un largo tratamiento recuperó la salud y ha vuelto a trabajar de nuevo.

Otro ejemplo, esta vez de un joven. Después de terminar los estudios en su región, trató de ponerse a trabajar, pero al no encontrar ningún trabajo estable tuvo que conformarse con empleos temporales o subcontratas. Como tenía unos ingresos muy bajos y no podía recibir ayuda de sus padres, pensó que había más posibilidades en las ciudades grandes y llegó a Tokio buscando trabajo. Tampoco en Tokio encontró trabajo fijo y tuvo que trabajar por horas, o como subcontratado, con lo que no consiguió la situación estable que esperaba. Cuando pedía ayuda en la asistencia pública se la negaban porque era joven o porque tenía padres. En esta situación, cuando

ya había agotado todos sus ahorros, se enteró por internet de la existencia de nuestra ventanilla, y medio esperanzado, medio incrédulo vino a la consulta. La acogida respetuosa que recibió le hizo pensar: "¡Todavía hay personas como ésta en el mundo!".

Después de recibir capacitación profesional, ha podido encontrar trabajo fijo.

EXIGENCIA DE LA COOPERACIÓN DE OTRAS PERSONAS

Esta ventanilla comenzó como una actividad de la iglesia pero como nos dice "A", "Con sólo gente de la iglesia estamos muy limitados, necesitamos la ayuda de otras personas" ya que los problemas no se solucionan sólo con que los voluntarios los escuchen. Las personas que vienen a la consulta están enfrentadas a problemas de diversa naturaleza cuya solución requiere de pasos concretos. Pero con un número reducido de voluntarios no es posible atenderlos todos, por lo que estamos en continua relación con personas que trabajan en programas de asistencia social, abogados, gestores, del mundo de la salud, empleados de la Administración, etc., y dependiendo de las características de cada problema pedimos la ayuda especializada. También estamos en contacto con organizaciones que proporcionan un lugar de refugio en caso de necesidad inmediata. Muchas de las personas que vienen solicitando ayuda están muy débiles y necesitan ante todo reponerse antes de empezar el proceso de atención a su problema. Otras veces, dado que sábados y domingos la Administración descansa, antes de poder ir a pedir la ayuda social se necesita un lugar donde poder vivir. En estos casos urgentes el refugio ha cumplido un servicio de primera categoría.

NECESIDAD DE APOYO PSICOLÓGICO-ESPIRITUAL

"B", otra de las personas voluntarias, nos dice: "En los casos

de ayuda social, por ejemplo cuando no se tiene vivienda, es relativamente fácil resolver el aspecto material y encontrarla, pero es mucho más difícil devolver la autoestima a esas personas". Entre las personas que se acercan a las consultas las hay que por problemas psicológicos se encuentran sin salida en la vida, mientras otras, acaban enfermándose debido a los problemas en relación con su larga vida de pobreza. Y también hemos de decir que los que vienen a las consultas son personas, en la mayoría de los casos, que en momentos de dificultad no tienen ni un amigo o familiar con quien poder hablar de sus problemas, así que, cortados todos los lazos de relaciones humanas, no es extraño que no puedan salir de sus complicadas situaciones.

Al conocer esta realidad, los voluntarios de la ventanilla de consultas se dieron cuenta de que después de recibir la ayuda social estas personas necesitaban seguir recibiendo otros tipos de ayuda, para no sentirse solas. Para ello, los voluntarios las visitan y proporcionan ayuda psicológica en su domicilio. Además, una vez al mes se llevan a cabo reuniones para los que se acercan a las consultas.

EN EL SEGUNDO AÑO DE ACTIVIDADES

Ya hace dos años que abrimos la ventanilla de consultas pero, dado que la situación económica del país continúa sin aclararse, el número de personas que solicitan nuestros servicios no ha decrecido. Para continuar con esta actividad dice "B", "Un problema que nos preocupa es ver cómo conseguir un grupo de voluntarios que pueda acoger al número creciente de personas que se acercan a la ventanilla. También, si pensamos en la necesidad de continuar la atención después de las primeras consultas, vemos que hay cantidad de problemas. Sin embargo no debemos rechazar a esta gente que se acerca a la iglesia, sino continuar en contacto con sus necesidades, y ofrecerles un lugar seguro donde intentar ayudarles". Y termina "¿No es esto lo que

Cristo desea de nosotros?”.

*** Para examinar nuestra vida ***

1) REVISAR LA VIDA Y LA SOCIEDAD

- ¿Qué has sentido al leer el programa de ayuda de esta parroquia?
- En la ayuda hay que combinar la ayuda económica concreta, con la recuperación como persona. ¿Qué puedo hacer yo?
- ¿Qué puede hacer mi parroquia para responder al [Llamamiento urgente para proteger la vida] ? O, si ya se están llevando a cabo estas actividades, revisémoslas.
- Si fuera posible releamos el [Llamamiento urgente para proteger la vida-2009]

2) MEDITAR EL EVANGELIO DEL DOMINGO (Juan 4 · 5 – 42 La Samaritana)

- La samaritana había tenido 5 maridos y con el actual no estaba casada. Podemos ver un pasado y un presente privados de amor y llenos de dificultades. Es seguro que no sólo había sufrido privaciones en su vida sino que tenía un corazón sediento.
- Esta indigente es sanada en contacto con Jesús, y cambia tanto que es capaz de anunciar a Jesús a sus conciudadanos. Saboreando el cambio producido en esta mujer, contemplemos el proceso por el que se pasa de la indigencia a la recuperación.
- ¿Cómo podrán las personas cercanas que están sufriendo recuperar su humanidad y su vida?

3) OFRECER ORACIONES POR LAS PERSONAS EN EXTREMA NECESIDAD

¿No habrá personas en nuestro entorno que estén sufriendo o no encuentren salida para su vida?. Recemos por ellos.

あとがき

カリタスジャパン担当司教 幸田和生

この四旬節小冊子の題名は昨年までと同じ「つなぐ」ですが、内容は少し変わりました。この小冊子が、四旬節の犠牲と回心を深めるために、今の社会の中で苦しみを抱えた人々やその人々に寄り添う人々の姿を紹介する霊的・司牧的教材であることに変わりはありません。ただ、その記事の内容を私たちのささげる献金と結びつけたのが今年の特徴です。

カリタスジャパンは、四旬節愛の献金を受け取って、援助などの活動をさせていてきましたので、長年この小冊子の編集を任されてきました。しかし、四旬節小冊子の内容と四旬節献金とは直接、結びついていなかったわけではありませんでした。記事で紹介した活動が、必ずしもカリタスジャパンの援助先というわけではなかったのです。そして、カリタスジャパンの通常の活動とは別に、この小冊子作成のための編集委員会が設けられ、多くの時間・労力・経費をかけて小冊子を作成してきました。

今回は、カリタスジャパン委員会の責任の下、各部会が原稿を準備することになり、カリタスジャパンの援助活動や啓発活動の内容を紹介するようにしました。このような内容の変化に伴い、四旬節愛の献金の趣意書もこの小冊子の中に入れることになりました。こうすることによって、四旬節愛の献金がどのように役立てられているかを感じていただきたいと思っています。

なお、今年の記事の中には、四旬節献金による援助とは別の、緊急人道援助に関するものもあります。また、ここに紹介した啓発部会の「自死と孤立」についての取り組みなど、カリタスジャパンへの献金は援助以外の活動のためにも、大切にに使わせていただいております。これらの点もご理解いただければ幸いです。

世界でも、日本でも、貧困の問題は時代によって形を変えながら、私たちに分かち合いの実践を迫ってきます。この四旬節を、私たちが深い祈りと愛の心をもって過ごすことができますように。

注記

愛の業、その主役は誰か（7 ページ）

〈注1〉国連ミレニアム宣言：2000 年 9 月、世界 189 カ国の国家代表が参加した国連ミレニアムサミットに続いてニューヨークの国連本部で開催された国連総会で採択された、21 世紀の国際社会の目標を謳った宣言。平和と安全、開発と貧困、環境、人権とグッドガバナンス（良い統治）、アフリカの特別なニーズなどを課題として掲げている。

いつも、ともに（11 ページ）

〈注2〉後発開発途上国：国連が定めた世界の国の社会的・経済的な分類の一つで、開発途上国の中でも特に開発が遅れている国々。現在 49 カ国。

人と人をつなぐ（16 ページ）

〈注3〉2009 いのちを守るための緊急アピール：

<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/doc/cbcj/090113.htm>

教会が生きる支えになるために（26・30 ページ）

〈注4〉カリタスジャパン啓発部会：旧「社会福祉活動推進部会」。2010 年 9 月より「啓発部会」に名称変更。

〈注5〉死の文化：ヨハネ・パウロ二世『いのちの福音』（裏辻洋二訳 カトリック中央協議会 1996）参照

声なき人々の声を届ける（31・34 ページ）

〈注6〉「国連世界食糧計画年次報告書 2010（英語版）」p.2

<http://www.wfp.or.jp/press/presspack.php?cat=3>

〈注7〉「国連ミレニアム開発目標報告 2010（日本語版）」p.17

http://unic.or.jp/pdf/MDG_Report_2010.pdf

〈注8〉<http://www.devinfo.info/mdginfo2010/>

〈注9〉国連経済社会理事会の総合諮問資格：国連憲章第 71 条および経済社会理事会（経社理）決議 1996/31 に基づく資格。会合出席や検討事項への発言、書面による関与を通して、国連の作業プログラムと目標への貢献を行う。経社理の新たな検討事項を提案することもできる。

〈日本カトリック司教協議会の社会系委員会発行物のご案内〉

社会司教委員会

被爆地ヒロシマ・ナガサキの司教からの要請～核兵器廃絶に向けて勇気ある一歩を～

発行 2010.2.26

被爆地のカトリック長崎大司教区・高見三明大司教とカトリック広島教区司教・三末篤實司教が連名で米大統領と日本政府及び各国の指導者あてに、以下の内容のメッセージを送った。(1) 未来への共通の目的すなわち核兵器廃絶と戦争のない世界の実現に向けてともに歩みたい、(2) 2010年4月の核安全保障サミットと5月の核拡散防止条約再検討会議において、各国の指導者たちがそれぞれの利害を越えて、核兵器廃絶に向けて確実な一歩を踏み出す合意を得ることを願う。

HIV/AIDS デスク

世界エイズデー ポスター (B4判)

エイズ啓発／情報ミニカード (名刺大)

発行 2010.12.1

「愛ってなに?」「あなたの大切な人から『HIV抗体検査を受けたら陽性だった』と聞いたらどんな行動、言葉がけをしますか?」という問いかけに対して、カトリック学校などの若者から寄せられたメッセージをポスターにした。



日本カトリック正義と平和協議会

声明文 東京からソウルへ 第二回9条アジア宗教者会議声明

発行 2009.12.3

声明文 鳩山首相の伊勢神宮参拝に抗議します

発行 2010.1.12

声明文 2010年7月28日の死刑執行に抗議します

発行 2010.7.29

講演録 『地球環境を守るために私たちにできること』 A5判 42頁 発行 2010.6.10

2009年9月に行われた第36回日本カトリック正義と平和協議会・全国集会の環境部会の分科会から、大江正章氏による「足元から暮らしを考える」の講演録。

講演録 『宗教者が語る死刑廃止』 A5判 56頁

発行 2010.9.5

2009年6月26日、カトリック正義と平和協議会・死刑廃止を求める部会主催の大阪教区本部で行われたシンポジウムの講演録。シンポジスト：松浦悟郎（日本カトリック正義と平和協議会前会長・大阪補佐司教）、雨森慶為（真宗大谷派東本願寺解放運動推進本部委員）、木村且也（大本本部国際部主任）、司会：ホアン・マシア（死刑廃止を求める部会会長）

日本カトリック難民移住移動者委員会

講演録『日本の出入国管理政策と国際人権法』 A5判 39頁
阿部 浩己（神奈川大学法科大学院教授）

発行 2010.9.26

外国人に対する管理がますます厳しくなることが懸念される中、国際人権法はどのような役割を果たすことができるのか。「管理」ではなく、「人権」に基づく外国人政策の可能性を検討し、出入国管理及び難民認定法改定案に伴う問題点を学ぶために、人権の視点に立って国際法の研究をしている神奈川大学法科大学院教授の阿部浩己氏による講演録。

日本カトリック部落差別人権委員会

小冊子『誰と共に生きるのか ハンセン病とキリスト教 ―信仰と人権のかかわりをめぐって―』 A5判 92頁

発行 2008.3

2009年4月1日、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律（ハンセン病問題基本法）」が施行された。この冊子は、ハンセン病問題の理解を深め、差別偏見を克服するための啓発資料である。

〈カリタスジャパン発行物のご案内〉

講演録『暴力・虐待と福音』 B5判 128頁 頒布価格 250円（作成経費、送料別）

発行 2008.10.1

2006年11月に実施したカリタスジャパン主催の第5回カトリック全国社会福祉セミナー「虐待・暴力・性暴力に被害者の視点で向き合う」の全ての講演をまとめたもの。

小冊子『自死の現実を見つめて ―教会が生きる支えになるために―』 A5判 44頁
無料配布（送料別）

発行 2010.11.1

「自死と孤立」というテーマで行った啓発部会の活動を小冊子に表した。メッセージ「自死の現実を見つめて」、自死の実態について、自死についてのQ&A、「カトリック教会における意識調査」報告、相談窓口などを掲載している。

『叫び 合本：1997～2002』（四旬節キャンペーン小冊子）

A5判 222頁 頒布価格 400円（作成経費、送料込み） 発行 2003.1.12

前シリーズ『ひびき』の前のシリーズ『叫び』を創刊号から6年分まとめた。

『ひびき』（2005～2007 ※2003、2004は在庫切れとなっております。ご了承ください）、『つなぐ』（2008～2010）のバックナンバーご希望の方は事務局にお申し込みください。送付いたします。

2011 年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2011 年四旬節キャンペーン資料として例年のように、小冊子『つなぐ 2011』、ポスター、献金趣意書（韓国語、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語）、募金箱（紙製、組み立て式）、献金袋を用意しました。各小教区には灰の水曜日前に届くよう手配していますが、追加要求などにつきましては、下記の各所属教区宛にお問い合わせください。

なお、『つなぐ 2011』には点訳本、録音テープが用意されています。

札幌教区	〒 060-0031 札幌市中央区北一条東 6-10 札幌教区本部事務局	Tel: 011-241-2785 Fax: 011-221-3668 E-mail: diooffice@csd.or.jp
仙台教区	〒 980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12 仙台教区本部事務局	Tel: 022-222-7371 Fax: 022-222-7378 E-mail: kyoku-office@sendai.catholic.jp
新潟教区	〒 951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656 新潟教区本部事務局	Tel: 025-222-7457 Fax: 025-222-7467 E-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp
さいたま教区	〒 330-0061 さいたま市浦和区常盤 6-4-12 さいたま教区本部事務局内 カリタスさいたま	Tel: 048-831-3150 Fax: 048-824-3532 E-mail: saitama-kyoku@mbm.nifty.com
東京教区	〒 112-0014 文京区関口 3-16-15 東京教区本部事務局	Tel: 03-3943-2301 Fax: 03-3944-8511 E-mail: info@tokyo.catholic.jp
横浜教区	〒 248-0006 鎌倉市小町 2-14-4 横浜教区福祉委員会	Tel: 0467-22-2064 Fax: 0467-22-4199 E-mail: yokohamafukushi@yahoo.co.jp
名古屋教区	〒 466-0037 名古屋市昭和区恵方町 2-15 名古屋教区社会福祉委員会	Tel: 052-852-1426 Fax: 052-852-1422 E-mail: caritasnagoya@aju-cil.com

- 京都教区
〒 604-8006
京都市中京区河原町通三条上ル
京都教区本部事務局
Tel: 075-211-3025
Fax: 075-211-3041
E-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp
- 大阪教区
〒 540-0004
大阪市中京区玉造 2-24-22
大阪教区本部事務局
Tel: 06-6941-9700
Fax: 06-6946-1345
E-mail: y.shiki@osaka.catholic.jp
- 広島教区
〒 730-0016
広島市中区幟町 4-42
広島カトリック会館
広島教区本部事務局
Tel: 082-221-6017
Fax: 082-221-6019
E-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp
- 高松教区
〒 760-0074
高松市桜町 1-8-9
高松教区本部事務局
Tel: 087-831-6659
Fax: 087-833-1484
E-mail: catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
- 福岡教区
〒 810-0028
福岡市中央区浄水通 6-28
福岡教区本部事務局
Tel: 092-522-5139
Fax: 092-523-2152
- 長崎教区
〒 852-8113
長崎市上野町 10-34
長崎カトリックセンター
Tel: 095-842-4450
Fax: 095-842-4460
E-mail: cnkh211@nagasaki.catholic.jp
- 大分教区
〒 879-0471
宇佐市四日市 196-3
カトリック宇佐教会 森園神父
Tel & Fax: 0978-32-3636
E-mail: jb-yasukun@nifty.com
- 鹿児島教区
〒 892-0841
鹿児島市照国町 13-42
鹿児島教区本部事務局
Tel: 099-226-5100
Fax: 099-225-0440
E-mail: kagoxavi@po5.synapse.ne.jp
- 那覇教区
〒 902-0067
那覇市安里 3-7-2
那覇教区本部事務局
Tel: 098-863-2020
Fax: 098-863-8474
E-mail: chancery78@image.ocn.ne.jp

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

この冊子の編集にあたり、差別語、不快用語については、厳正な検討を加えて注意を払いましたが（面談者が話し言葉で使っている、あるいはアンケート回答者が自ら使っている用語、用法はそのまま使用している場合もあります）、お気づきの点がございましたら、ご指摘、ご教示いただければ幸いです。

この小冊子は点訳・録音テープの作成をロゴス点字図書館にお願いしています。2010年1月1日より著作権法が改正され、これまで視覚障がい者のみに貸し出されていた点字図書館の録音図書（テープ・CD）が高齢、病気などの理由で活字の本を読むことが困難な人にも貸し出されることになりました。ご希望の方はロゴス点字図書館（電話：03-5632-4428）までお問い合わせ下さい。

四旬節キャンペーン小冊子 No.25 2011 年

「つなぐ 2011」

2011年3月9日 発行 ©カトリック中央協議会2011年

編集 カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10

日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411

カリタスジャパン 電話 03-5632-4439（直通）

FAX 03-5632-4464

E-mail: info@caritas.jp

URL: <http://www.caritas.jp/>

印刷 精興社

Printed in Japan

表紙の写真 © Katie Orlinsky/Caritas 2010



カトリック教会 **カリタス ジャパン**®

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
TEL: 03-5632-4439 FAX: 03-5632-4464 E-mail: info@caritas.jp